

な基準はそれだけであった。山田洋次の映画「学校（I）」に次のような言葉が出てくる。「学びたいという生徒がいて、よし教えようという先生がいる、それが学校というものだ。」日本において、今やこの学校の基本構造が崩れていることは、誰の目にも一目瞭然である。(2) 幸い清泉女子大学で講義を始めて以来、授業をやりにくいと感じた経験が一度もない。聖書学に関するものも、ギリシャ語やラテン語も、人間論やキリスト教思想に関するものも、みな耳を傾けてくれる。8年間、私が属するカトリックの一つの修道会であるドミニコ会の管区長を務めたため、ろくに授業準備が出来なかったことを申しわけなく思っているが、不思議に学生一人一人耳を傾けてくれた。ドミニコ会とは、800年程前、フランシスコ会と同時代に創設され、O.P.即ち *Ordo Praedicatorum* という名称で、説教を目的として生まれた修道会であるが、我々の先輩には、今なお中世哲学の中心軸となっているトマス・アクィナスやエックハルト、火あぶりになったサボナローラや画家のフラ・アンジェリコ、そしてラスカサス等、時代を生き抜いた人物がいる。8年にわたるその修道会の管区長職のため、落ち着いて机の前に座ることが出来なかった。その間、ほとんどまとまったものは書いていない。しかし、忙しかったから書けなかったというよりも、70歳くらいまでは、何も書かぬつもりでいる。親鸞が生涯「己証」の人、即ち自己の宗教体験に徹しながら真実を確かめたように、宗教に携わる者は、むやみに文章を書き残すべきではない。親鸞自身、「教行信証」は別として、「浄土分類聚鈔」は84歳、「唯信鈔文意」は85歳、「三帖和讃」もまた晩年の作であった。確かに、限りなき大物は文章を残さない。ソクラテス然り、孔子然り、イエスもまた然り。しかし、不思議なことに、こうした大人物の記憶（ヘブライ語で *Zikkaron* というが、これが私の博士論文の題である）は語り継がれ、書きとめられながら絶えることなく伝承されてゆく。私も何一つ書き残したくない。だからこそ自己評価も書きたくない。しかし、自己評価を書きたくない最大の理由は、私も大人物に連なる可能性を残しておきたいためではなく、人一倍なまけ者であったあの「寅さん」((1)「寅さん」は私にとって人間論の大事なテーマであるが)、あのなつかしい寅さんの系列に連なりたいが故である。

とはいえ、(3) (4) キリスト教文化研究所の所長に任命されて以来、年報の発行や20年間続いている品川区民対象の土曜自由大学の責任者のため、(1) 2001年「コムニオの神学」、2002年「神のイメージを変えたイエスの風貌」及び「古典の現代性—マルコの手法と

イチローの打法」、2003年「主の祈りとゲッセマネにおける祈り」等を書き続け、おまけに知泉書館より『神と人の記憶—ミサの根源—』を9月30日に出版した。また、2001年には土曜自由大学で「聖書からみた神への呼びかけ—Abba という幼児語—」と題する講演を行なった。これでは寅さんの系列からはずれてしまう。出版した今やまた聖なる無用性に生きた、寅さんの怠慢に帰ってゆくつもりである。

(注) 上記に付した番号

- (1) 研究活動
- (2) 教育活動
- (3) 管理運営活動
- (4) 社会的活動

門野 泉

(言語教育研究所教授)

1. 研究活動

私の研究は、二つの柱からなっている。一つは、英国演劇、特に、シェイクスピア劇の研究であり、もう一つは、比較演劇学の視点から、歌舞伎を中心とした日本の伝統演劇とシェイクスピア劇を比較研究することである。この二つの研究は、一見、異なった方向を向いているように見えるかもしれない。しかし、どちらも、上演を視点に入れて劇を読み解くという共通項で結ばれており、二つを平行して行うことで、東西の演劇の本質を考え、それぞれをより深く理解できるように思われる。

(1) シェイクスピア劇の研究：

シェイクスピアは、今日、英文学を代表する作家のように考えられている。しかし、シェイクスピアの評価は、時代によって大きく変化してきた。シェイクスピアの評価や上演を通して、受容の歴史を振り返ると、シェイクスピア劇の特質のみならず、時代精神が浮かび上がってくる。

座付き作家であったシェイクスピアは、劇場で上演するために戯曲を書いたにもかかわらず、英国ロマン派の人々は、シェイクスピアを過剰に崇拜するあま

り、シェイクスピア劇の上演不可能説を唱えた。私は、劇の本質を明確に捉えるために、戯曲の本来の目的を認識し、豊穡なテキストを精密にかつ立体的に読み解くことが、シェイクスピア研究の原点であると信じ、舞台上演を視野に入れたシェイクスピア研究を行っている。したがって、テキストの精密な読みを行うと同時に、上演資料の収集と英国でのシェイクスピアの舞台を観ることも、研究を進める上で不可欠である。

シェイクスピアは、現代劇にも強い影響を与えているので、シェイクスピアと現代劇との関連を考察するために、現代作家の作品にも極力触れるよう心掛けています。最近では、舞台の演出家の手によって、シェイクスピアが映画化される場合が多いので、映画まで研究に含める必要が生じ、守備範囲は広がる一方である。

シェイクスピアの大部分の劇は、ヨーロッパの神話や物語から題材をとっている。したがって、シェイクスピアが、よく知られた題材をどのように劇に取り入れ、どのように変化させたかを考察すると、シェイクスピアの独自性や特質が浮かび上がってくる。共著『シェイクスピアの変容力』（平成 11 年、彩流社）では、劇の題材となった原作、シェイクスピアの劇自体、17 世紀になされたシェイクスピアの改作とを比較検討し、シェイクスピア劇の特質を考察し、シェイクスピアの独自性にメスを入れた。

能や歌舞伎において、物語が重要な要素となっているように、シェイクスピアも、物語を劇に取り込み、舞台上で巧みに活用している。数年来、シェイクスピア劇における物語の意味と機能について考察している。

『シンベリン』の終幕におけるヤーキモーの語り（平成 12 年、英米文化学会発行「英米文化」30 号、）や、共著『フィロロギア』（平成 13 年、大修館発行）の「私の名はマリーナ」は、その研究の途中報告である。今後は、初期と中期の喜劇とロマンス劇の関連に触れて行きたいと考えている。

（2）シェイクスピアと歌舞伎：

比較演劇学の視点から、シェイクスピア劇を考察し、また、シェイクスピア研究の手法から歌舞伎を研究することは、幼い頃から歌舞伎を観てきた劇場経験を生かし、シェイクスピア研究におけるテキストや批評の読み方を歌舞伎のテキスト解釈に活用できる上、日本人としてシェイクスピア研究に寄与できる重要な分野であると思う。

歌舞伎は、日本の古典芸能からさまざまな要素を吸収し、芸の身体伝承に成功した世界に稀有な古典演劇であり、また、現在も、商業演劇として生き続けているバイタリティー溢れた演劇である。英国のシェイク

スピア劇も、古典でありながら、現代の観客を魅了し、商業演劇として成立している点で、歌舞伎と同様のエネルギーに溢れている。エリザベス朝の劇と歌舞伎を研究すればするほど、共通点が多く、さまざまな発見があり、興味は尽きない。

前近代劇としてのシェイクスピアと近世の歌舞伎：今日、シェイクスピア劇は、近代主義的リアリズムでは表現不可能な演劇的スケールを内に秘めた劇である。シェイクスピア劇を読む際、前近代劇としてのダイナミックな演劇的特質を読み解くことが肝要なのはいうまでもない。しかし、18 年間のピューリタンによる劇場封鎖を経て、王政復古期に劇場が再開された時、シェイクスピアの時代とは劇場、俳優、観客が一変し、シェイクスピア時代の演技の身体伝承を失ってしまった。その結果、現存する資料からシェイクスピア時代の上演形態を解明する作業は困難を極めている。

幸い、日本は、能や歌舞伎のような伝統的身体伝承をもつ演劇を有する、世界でも稀有な豊かな演劇風土に恵まれている。シェイクスピア劇のテキストや上演形態を類推する手立ての一つとして、能や歌舞伎の研究を活用して、シェイクスピアのテキストの意味を探り、シェイクスピア研究に貢献したいと考えている。シェイクスピア劇を読み解くヒントを歌舞伎に探る試みは、「歌舞伎とシェイクスピア」（平成 6 年、英米文化学会発行「英米文化」24 号）以来、私の研究テーマの一つである。Shakespeare in Japan に寄稿した“The Kabuki Version of Hamlet”（平成 11 年、The Edwin Mellen Press 発行）は、歌舞伎様式を用いて『ハムレット』を上演した際に生じた諸問題点を指摘し、歌舞伎とシェイクスピア劇の本質を考察した。最新の研究、「ミドル・テンプル・ホールの方」（平成 15 年、英米文化学会発行「英米文化」33 号）では、シェイクスピア・グローブ座による『十二夜』の復活公演における歌舞伎の方の影響を考察し、シェイクスピアの「女方」復活の意義と問題点を論じた。今後も、比較演劇的視野から、シェイクスピアと歌舞伎の研究を続けたいと考えている。

上記の研究と同時に、シェイクスピア研究の手法を歌舞伎のテキストや上演の研究に応用する試みにも関心を寄せている。その手始めが、「歌舞伎のイコノロジー『寿曾我対面』」（平成 9 年、「清泉女子大学紀要」45 号）で、その後、『葉武列土倭錦絵』再考（平成 10 年、清泉女子大学人文科学研究刊、「人文科学研究所紀要」19 号）や、「“Sukeroku Yukari no Edozaka: Its Logos and Mimesis”」（平成 14 年発行、「英

米文化」32号)において、この研究方法の可能性を探った。今後は、能にも応用したい。

2. 教育活動

平成15年度は、一般外国語科目の英語3コマ。英語英文学科の科目も3コマで、英語圏文学基礎演習で映画『理想の結婚』の脚本をテキストに用い、イギリス文学演習では、シェイクスピアの『十二夜』を教材にし、シェイクスピアの英語を丹念に演習、イギリス文学特殊講義では、シェイクスピアの喜劇と悲劇に関する講義を行っている。さらに、後期には、ハリー・ポッターを教材に用いた人間論を担当する予定である。英語の教員として、一般外国語の基礎英語Ⅱを、私の専門の分野に関しては、英語英文科のイギリス文学特殊講義を取り上げ、それぞれの授業の内容に簡単に触れることとする。

(1)英語教育：

語学教育は、スキルに目を向けがちであるが、じつは、異文化理解の第一歩としても、きわめて重要な科目である。

基礎英語Ⅱの講読のクラスは、入学試験の英語を選択せず、英語の基礎力に不安を抱いている学生を対象にした特別クラスである。基礎力に不安があるといっても、大学教育を受けている学生なので、初めて英国に語学留学する学生の体験記を扱った教科書を選択し、大学生の知的レベルや興味に合うよう配慮した。

私の授業では、テキストは素材に過ぎない。テキストの問題を発展させ、学生に、関心を寄せる現代社会のさまざまな問題を扱った新聞、雑誌、インターネットの記事を収集させ、その後、グループ作業の結果発表を行う。

記事の収集作業や研究発表の準備を通して、英語が情報収集の有効な手段であることや、情報から多様な解釈が可能であることを実感させるよう指導している。学生たちが持ち寄った多様な記事を使うと、学生が素材に興味を持って予習してくるので学習効果が上がる。

英語の単語の語源や発音の変遷を学んだり、英国の経済、政治、歴史、文化等を読み取ったりして、学生は、高校の英語の学習とは一味違う、大学らしい英語の授業を楽しむようになる。英語の運用能力を向上させたいと願う一方で、苦手意識を強くもつ学生が、英語に親しみ、英語を学ぶ喜びと、使える便利さを実感できるよう、ビデオやテープを活用し、教材の工夫をする必要がある。授業は、シラバスに縛られず、教室

にいる学生の能力や関心に柔軟に対応するよう心掛け、学生の反応や習得度を確かめながら、授業を柔軟に進めている。

教員としては、教養教育としての面を見失わないように心掛ける一方で、英語運用能力を向上させるために、辞書の引き方、インターネットを利用した情報の収集、ニュースの聞き取り方や読み方等、実際的な学習のコツを伝授するよう努めている。

(2)シェイクスピア劇の講義：

シェイクスピアに関する講義に関して：シェイクスピアのテキストを専門的に勉強したい学生のためには、演習科目が別に置かれているので、イギリス文学特殊講義では、教養教育的な要素を入れ、シェイクスピアの作品を学生たちの生き方や現代社会と関連づけ、心の糧、人生の指針となるよう心掛けている。

宗教、社会制度、文化が異なるエリザベス朝の演劇の理解を促進する手立てとして、テープや映像は有効である。とはいえ、はじめてシェイクスピアの原文に触れる学生も受講しているので、講義であっても、学生が原文を自分で読むための課題を与え、シェイクスピアの英語の文法や意味が現代の英語と違うことなど、原文の難しさだけでなく、面白さにも気づいてもらえるよう努めている。そうすることで、学生は、翻訳では不可能な、原文の魅力を知り、一つの言葉に織り込まれた複雑な意味と美しい言葉の響きやリズムに触れ、シェイクスピアを一歩踏み込んで理解することが可能になる。シェイクスピアの言葉の豊かさを実感した上で、劇作家の人間への深い洞察力を学生が実感できるよう努めている。

講義課目ではあるが、現代社会に生きる学生一人一人が、シェイクスピアから感じ取り、考えたことを、随時、レポートとして提出させ、学生の反応や手ごたえを確かめながら、講義を進めている。学生の瑞々しい感性に触れ、私自身、シェイクスピアの魅力を再発見する喜びを感じている。

私のシェイクスピア講義のもう一つの特徴は、シェイクスピアの演劇の講義において、日本の伝統演劇に触れることであろう。英米文学を学ぶ学生のなかには、日本の文学に関心が薄い学生が見受けられる。シェイクスピアの作品に興味を示しても、自国の演劇に関心を持たないのは残念なことなので、シェイクスピアの講義の折に、日本の伝統演劇に対する学生の興味を喚起し、自国の伝統演劇の魅力を海外の人々に伝えることが可能になるよう願っている。

3. 管理運営活動

平成 14 年度に創設された言語教育研究所の所長として、清泉女子大学における一般外国語全般の管理、運営に当たる一方で、外国語教育の将来の姿を検討している。現在、社会において、外国語の運用能力を身につける必要が求められ、しかも、多様な言語を用いる機会が増加している。このような社会の要請と、学生の要望を満たすために、平成 15 年度は、選択科目として、イタリア語、朝鮮・韓国語、TOEIC 対策講座を新設した。新設科目が、どのように学生に受け止められるかを慎重に見守り、より良い内容にするために心を砕く必要を痛感している。

外国語科目の新設と同時に、必修科目として外国語の充実も望まれているので、多様な外国語運用能力をもつ学生に適した外国語教育プログラムを現在検討中である。外国語科目は非常勤講師への依存度が高いので、専任と非常勤の教員が連絡を密にして、学生によりよいサービスを提供したい。

4. 社会的活動

ロンドン大学客員研究員として英国に在住中、平成 12 年 9 月、ロンドンで開催されたシェイクスピア・グローブ・センター国際会議に出席し、英国のグローブ座関係者のみならず、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ドイツからの代表と活発な交流を行う機会に恵まれた。平成 12 年 10 月、国際シェイクスピア・グローブセンター日本支部理事に就任。その後、組織の再編成及び名称変更が行われ、平成 14 年 10 月に日本シェイクスピア・グローブセンターとして再出発することとなった。現在、日本シェイクスピア・グローブセンター理事として、国内におけるセンターの発展に尽力する一方、本拠地の英国および加盟国との交流にも努めている。平成 14 年 9 月にロンドンで 1 週間に渡って開催されたシェイクスピア・グローブ・センター国際会議に日本代表として出席し、伝統的な演劇をもつユニークな国として、リサーチ・セクションを創設し、日本がシェイクスピア・グローブセンターに学術面から貢献する意向を表明した。今後は、日本のリサーチ・セクションを充実すると同時に、東西の演劇交流に貢献して行く所存である。

国内の学会では、上智英文学会の評議員をはじめ、英米文化学会における分科会活動等、所属するさまざまな学会における活動を通して、多方面の研究者との幅広い交流と共同研究を行い、そこで得た研究成果を

教育の場に反映させるよう努めている。

2004年度 清泉女子大学 点検・評価報告書(別冊)

(2004年度申請 (財)大学基準協会相互評価・認証評価報告)

発行: 2005年8月

編集: 清泉女子大学 自己評価委員会・自己評価運営委員会

発行: 清泉女子大学

〒141-8642

東京都品川区東五反田3丁目16番21号

Tel 03-3447-5551(代表)

印刷: (有)創文社